聞集

報恩篇　孝行篇　勝蹟篇

二

文季
13
71

へ13
1184
2

新著聞集

報仇篇第四

猿恨恠をなす

殺害の僧子となりて家をほろぼす

怨念たちまち巫女に附て敵を害す

験士を殺して後刑戮せらる

僧賊を掠奪て一族悉く滅す

甥を殺して網を焼く

非理に奴を殺し二子狂病す

馬を許て狂灸す
奴婢を禁獄し蛇に變て命を奪ふ
馬の筋骨を傷て神前にて血を見る
大蛇を殺害して後同日に灸す
茶を奪ひ股を截七代足を病
虎皮牛を纒ひ牛の鳴をなして灸す
鼠指をくらひ痛む

島田藏書

猿恨帖をなす
擲筒殿北山大原の知行所にて鉄炮を持大猿
のかゝりしを撃けるに猿おのれが膝を敷て
手を合せけるしを打殺されしその日より心ひ
ずゝきて都にのぼりなんと常に来れる醫
師の方へしらせ頓て脉をとらせるへばおもきを
痛の病にてハなかなか鍼を用ひねば立所に
驗なくなんありしかバそをもと求めけらしに取へ大原の
庄屋来りしかば汝が方にて鍼を取てなんせよ

こ使をはなちけるに庄屋もいたく幸ひ人にたのまれ
て鍼をもち来りぬ急なる事のてなれバ先これを奉
じて針をしばしうつと頓て醫師乃教し如くに
調て飲しめけるに熱甚盛なる如く譫言を云
わづらしかりけれバ追々醫師乃許に人をやり
けるに漸く醫師も来りて鍼を飲ませてより
かくそれぞれと語る醫師おどろき其ハ此なる
江州の麁り口うつかりし取り使なしくも及しで
承りてまゐりしと言合これを呼ぶ不思議乃事なり

いかにも故あるべしとて大原より人はなちて問せ
ければ庄屋此なるハ京都より出ける人にて是
まで年月此者ぞ櫛笥殿乃連枝にておはし
ける若王子僧正と六角乃正仙院僧正と相共に
壇を莊りていのりせられけるに壇乃上に大猿一ツ
あらはれしを僧正頓て引組壇より下におちたるひ
ようし猿をおさへんとせられしに猿ハ逃て門外にて
影うすく成りしかバ僧正も其ハ此いのり叶ぬと
て壇をすてられしは附に病者息たへけるとかや

殺害乃僧子となりて家をほろぼす

江戸にて何がし家中乃曽根源内といふ者の子八十郎は幼年より博奕を誇り夜ごとに出ては妻娘あるにも知らず作法みだりしきに成りしかば親ハ切腹子二人ハ千住にて首を刎られし親切腹乃附検使にひらひらしく待ゐへ申しきすり行り我若子乃ありける商ひ聖と日来云けるまし子乃行りて金はたらかしにありて部屋に泊りし何ぞ附金子三百両餘りおちまり今度ハ

仕合なくて自ら京へ上るとて其の夜も同じ床に寝たりしが俄に思ひあたりし此人を殺し金をとりなばたちまちに悦び得ハ快よからんと悪念起りしを出家といひ親しき友といひ士の似合ざる事いふでなへきとを思ひて寝れる更に寝たるて終に暁方に刺殺し死骸をかくし隠し伴の金をうばひて不足なりしかば後にハいとしくもありしとおもひしかども悔りしそのゝち妻をむかへて八十郎産れしや否や産屋

乃内にて嬰てふたりかの聖にてすこしも違はず
なかりし不思議なるよ聖の腰下にハほくろありし是
にハなきかくされども何ぞやすまかる程ハ聖の悴子
に産れたるよし恐しくおもひしのいかりし
長くとまりぬ今かくの憂目にあひ武士の名にて
いかげる終をとげしも是全く八千弥が科なれど
吾積悪今まで身に報ひまいりたるを懺悔し後
生を助る便りもあるべからずと恥をも顧ずして
かせしまりおかく一返の回向なさしめさせ

き母へいはき方にハ是をつねきくるものかならず　邪
あやまりしことを今こそ申す世よとて切腹せしと
あり梨

瞋念忽ち巫女に附て敵を害す

江戸浅茶の水の山口法文太夫家来を非道に
殺されし霊鬼主人に附けぬを口ばしらせ
し一つハ神子を招きよせて立させ祈ければ
祈念なる抜刃を立かけるを甚刀をふりける
法文太夫を只一討に切殺しける時則神子

評定所へ引出し穿議ありしに神子
の曰く更におぼえ侍らず我女の身として何の
遺恨もなきに何ゆへなさんやと云ひしが
何もかたりぬべきまじく吟味ありし神子ハ
難をのがれたりけるが

験士を殺して後刑戮せられし

京八幡の橋本に麹屋と名のる者の定宿に
しける山伏ありける時来てかたりしハ久しく来り
しがどもはのみかずもなかりしに今度来る
祈祷をたのまれ布施に銀子二枚をもらひし其祝に
酒のみいろゝせんとて行けるがそこに乱暴のものあり
我もかゝらんとて肴をつゝみ人をだひて呑ありし
山ぶし酔ふして寐たる所を刺殺してありまれ
京より来たらせける娘来り居て此ありさまを見て
親なるものおそろしきわざするものかなとて走りける
が頓て乱心して口ばしりて情なや僅の金に我
を殺す此恨少からじみるべし汝安穏にハおく
悔しきぞかし口惜やと言り喚ぶ程こそ親の

首に縄を付べきさまをみせしめてちまも刺殺し川
に流しけり妻がいもと娘が布子は剥て流し
ありかといふをよく云ひふくめ遥かに流し死骸
を追けるに裸にして出けるにかくいふも大悪人
中へ追つきて盗人の首とせし科なく磔に掛おく
此の村何くありしひとへあるかやさんしの悪業
を懺悔してありけり

僧賊を掠奪ひ一族悉く滅す

奥州菊田郡下河村の江尻忠左衛門といふ者子
そも仲間に加りし中に平四郎と云しもの羽黒権現
の社僧長明寺へしのび入て隠意ありし中
ありきが寺の金をとるとて扨平四郎に云合て手配を
盗ませしより住持ハかくしもおして程経て金を返
せしと云ければ疾く謂けりといへどもに遂に
公事になりぬ守護の内藤帯刀殿の前にて
対決しけるにしか証文出せよと宣ひけれども
元来泄文なきが出家の仏会けるにやすとて
負になりなむ帰るうち八幡の祠なりしも寺

ろいよく此神前にて誓詞を書灰になし一盃に
呑んとしければ恐ろしさに身の毛よだちおそれをなし
かくして神水にて呑ぬゆゑそれより里の人の
十王堂へ立よる長明寺向叢二枚うちかけ堂内
へ投入し縁なきは冥途の證拠にうちかゝへと
誓い寺へ帰り口おしや我は損をしけるぞと守護
のあとにて両目どうしたさの上は活て人に
面をむけんやさもなくば自殺して恨をはらすべしとて
断食して空しくなりぬ哀れなるは熱さに八海すゝ

家をさて程経て後或時早朝月日回りて其の像の
三十三回忌すぎて子孫たちの時に其の
長明寺笠もちかぶり杖をつき来るとて身を縮
めしおそれかしく程なく長明寺當住を招きて
祈念加持してまた神子に頼ひ休せ申せり
振こみ口寄せしに不思議や長明寺の
霊の走りよる汝は其者ぞ我宗を怠れば
へ弟子の身にして祈祷は何事を真は此家
の事は未だへりし師恩をわすれし汝を先にする

殺さん族ても此一族ことく滅さんとおもひし
かど富貴なりしに後盤の足をもぐやうにする
ひしぎるは一入嘆も深かりしにまたも今は
許しの兄弟なりは追手より殺さん平四郎ハ来かゝる
盗し科なれども其お思慮もちゐらんことより
なし此好身は不便なれば此世にても科を
許すのありがたくぞんじれども病身なりしてしへしと
甚嘆り剃んおそろしさに長明寺ハ祈をやめて
外へ出るまで他行しまして執しあるを想たる

長右衛門八兵衛忠五郎兄弟四人同じ枕にて
死しぬれバ後家子ともなかしも皆追々に死ぬ
恵日寺乃圓智ハ真言宗乃名匠なれバたのみて
七日乃護摩を修せしに六日にあたる日標
死しけるにて夜がうまて日数を合せて成就して
うかの霊平四郎にて付そいて我崇をなす
所にて圓智まて礙をなすよしかの法師
頃に憂目にに逢せんと思ひ取りて恵日寺ニて
新しき卒都婆立させしそれの梵字何者やらん

削て捨よう円智ニハ己こそかく成根籍ハ俗人乃
すべきうりに何ぞ浄土不有る山法乃浄土宗乃衛
その所為なるべしとそ使とそ有るこまハ成の
外乃こ云定あり捨置かしそち護へ訴へあるを
寺社乃方ハ私ありあらずしとそ江戸乃評定所
みし對決せりましめ円智不届ゆへりとて
追放せられしを円智おいろく弓護乃浄土宗か智
まくに悬負れりして我負ろうし大ろ憤り
江戸乃駒込ろ隠き螺乃法師於の外大勢を

はかりて帯刀殿を調伏しあるよしの訴人有て
くろめうき穿鑿乃上にて餘人ハ許され円智とく
螺坊主ハ皮をそて下さうき梟首せられし
あれうを後ろれもい合せハ皆あれ長明寺お
怠悪乃いとす取なる惣党一人お邪道中へ
く成災難乃人あてかりあろよかをたそれけるハ
なうし

螺を殺して網を焼く

相列本目浦ろ大工八郎兵衛といふもの螺ろ

悪人なりくまでなりけるひしが終りをよくめて海
川へ沈め殺しけるハ延宝七年乃冬のことなりし
翌年乃夏妻男子を産取揚てミれバ額に角
ありて上下乃歯そなへ其面がら蛸に似たりし
とぞおそろしさて細工乃道具箱を上より置て壓
殺しけるとあり且ハむかし持上したる夫
と神子の梓にかけて咋ありし秋を海へ流し
恨みふかくて子と産まれ仇をなさんとせしなど聞く
殺されぬるも力なし夫乃上ハ火難にも逢けし

となりしがそのゝち俗体のまゝにて一所に縮を
干かきしに火気が縮のごとく僞り燃ながらにて
やみ絶りしとかや

非理なる奴を殺し二子狂病す

尾州遠山掃部といふ人毎年家来を手討に
成敗せられしその數をしらず掃部二人乃子
ありて兄を甚之助弟を馬之助といふともに乱心
してありしその謗るを聞ハ獨言に我ハ何なる何
なり何故ぞ其が殺しの科なりて

侍るも命乃義ほゆるし給ひ助まゐらせけるやと後
ふ尋ねけてハ又眼をいからかし悪き奴かな其まゝ
後もあらず云けりや何条かのれを助けんと云て
かたな抜きて頭をうちつぶしけれ
即ち絶命しけるとその儘にすて置ぬ又
よそ人ありて一年はかりにあまり身のほとを嘆しけるか
す兄弟ともなり同しかりしとなん

馬を詐て狂死す

松平阿波守殿馬をやめさせんとて飼をしきりやと
務るあひしけりおし飼はきるを甚しかりしと
彼そひいまゝ飼得ずしかりしハ其れ馬を
責まなふ忽しまる其の馬ハつかれて終ふ死ありけり
其のうち馬屋乃者狂氣して口ハしるやうハ殿乃
おもきりも飼をあたへ乗じて其得りしてけり
おのきを詐りし也へかく病づきあふりしそおの恨
海りけりと云て終わりけり狂ひ死ありけり

奴婢を禁獄し蛇ふ變して命を奪ふ

江戸久太郎町ふ紺屋佐太郎といふ者ありけり或夜

召す人よ逢家内乃穿鑿いときびしかりし小下女が
密夫を入れ夜来りしをもつて奉行所に訴へし一〻
ぞ問糺りかくる此男ハ佐久間町三丁目金兵衛と
いふものゝかゝり人なるが此ものハ方あるまする者
ありハ彼のほどをかしやなく領りぬ件乃女乃ミ
拷問ありてきびしき責にびしくて重り煩ひ
しておんり看病すべしと宣ひしかど佐太郎
三妻此乃亡きよ嘆きり盗人ありて頁とハ此もの也
始めハ奴称く云と合ゆりして終りて篭死し

なりしを死骸をさるまおくべしやと綾らきましかど
猶もきれかのいぬくししとて耳にもきゝいれざりし
ニハ囚獄司より寺へ送りしぞれに佐太郎が
妻いぬゆりしが夜を行灯乃ちへより蛇嚙まわりし
それ時ハ殊よなりしてありて蛇を殺しして捨
きかども又次乃夜ハ来り居なかりすべきなるかく
もて扱しが終に身滅るべし死骸を沐浴
させあるまり首に蛇乃纏ひありしと吏みる
より身乃毛堅て憂なりけるハ家を出発心

修行乃みとしちうりぬ
馬乃筋骨をいためて神前よ血をとる
武蔵乃八王子千人衆頭原半左衛門殿はかり
馬乃尾筋前すじを切焼鉄を當ることを好まれし
かる年乃元日より子息權十郎氏神へ社参せん
とて鳥居乃おまでゆかれしおかる汚乃馬の血や
また何といふこゝぞ神前まで漫にいり参詣ハちる
惡うらん供乃侍どもいかゞする宜なりや血ハ曾て
こゝへ侍らずといへども自が目にハ皆血にて踏所

なしとて鳥居乃外にてぬかづき帰られり頃
ひつき馬乃いたく真似をして七日ばかりさし日
邪気になりて云く無念や親乃よかるぬことをして
馬をくるしめたまふ罪障つまり報ひ畜生道に
堕するの乃かなしけれよとて後悔すれども甚夜
しつかしくなりき。

大蛇を截害して後同日に死す
藤堂和泉守殿内若原伊豫といふ人乃家来甚平
といふもの伊勢乃賀間と舟にて通る時岩に當

ろくおりひしけり影しくひゞきて大蛇動き出る
甚平すこしも騒がず刀をぬき大蛇の頭を討おとし
其長十三間ありしかば其の八跡より祟をなすと
いふ故實ありとて胴を三つにきり首と一所に
葬て弔ひしけり十三年めの同月同日同刻に
水をのむとて咽て死ありいろいろ其の怪きのみ
ありあるにやゆゞめて蛇の此へなるべしと人ゝ
すしはへりき
茶を奪ひ股をきり七代足を病む

関ケ原陣にて三馬才三郎といふ人山伏の茶裏と
いひて通りあるを無粮のゆゑとて山伏の右の
高股を切ておとしし茶を奪ひけるがあれど山伏
大きに嗔て七代八恨をなさんとおめきて死ありし
おとは此へよく才三郎右の方投足ふなり隠居
して家督をつがせど足なえりて家督の子又
投足なりかくるの今みにいたりて同じ牧野駿河守
殿家老にてありしや終りし。
虎皮牛を腹とひ牛の鳴をなして死す

江戸尾張町一町目乃扇子や牛乃子をもちゐ
面より足まで虎乃皮にてぬいふくミ堺町乃
芝居にて出し大分乃あたひをとりしかも
鳴せじとて口をぬいあはしけるゆへ食物を断
て六七日己れど死ぬるを取られて五六疋に
及べりその比よろづか乃者他はしらずして悩し
後にハひそかにすらしに牛乃啼声をなして
死しけるとなん
鼡指を噉いてむ

江戸小石川傳通院にて利発といふ所化ありけり此僧
若年の時ある日の申乃刻ばかり鼡をとら
へんとて追ゆかしに右乃手にて握殺さしに
鼡頭をかへし指をくらひて死ありき當分に
すこし痛しかど早速よろしくなりて侍りしお
そのゝち日おとりて勉をひて伴乃指もなく
かいうて一生お居回しりありかの鼡いっ
まいる最期乃一念にや迷ひとり怖しき事
んありとはなて語まし

新著聞集

崇行篇第五

歌才少女ミ川かう松雪と号す

了然禪尼面を焼て法をもとむ

禪尼面を焼き詠歌法を承く

洛陽高譽上人

音譽上人ミ川かう火車に乗る

壯女法をきゝ頓て安養を慕ふ

寅歲和尚金を捐經を修す

善貞法師榮を嫌ひ乞食す

幡隨和尚邪宗を教化す

乞食自害して歌をのこす

霊合山開唱阿闍梨

須西身を責香烟に佛を現す

三海上人雨を祈て雷を鎮す

父誦經娘咏歌

武士姓を重んず

趙譽松を植兒鳴蛙喧

安藝以八和尚

伊豆即往法師

山崎宗鑑

戯僧遺書

木村長門守最期雪操

不破萬作戀情

歌才少女みつから松雪と号す

伊勢乃國何氏の娘にして犬といへる者なり本性やさしくして和歌を好めり後乃朝の意といへる題にしてきぬ〳〵のわかれ経の心ひていまさにつきるれなりな十三歳の齢ハ元禄十年正月に身まかりけるかいまハよく後世のいとなみをも悟てける僧を招き我亡名を松雪と賜りけれはりし比松の雪といへる題にて歌よみ侍りけるとて

ゆくはらや志賀の濵松いつよりも今一しほの雪ハ深さの

死出路乃糧ハ十念を授ケ得させよとて念比ろ
念佛し
そろそろに朽なバ朽よかしとておなしくはかなくなりけるの
ゆく後ておかりしとかや後末の娘ハかかる艶才なれ
バしきりにいかなる便りてか大内へきこしめされ
何かれ詠ミし中に五首清書させあるとかや餘の一首
いまだしも松の雪と云ふ題を案しわづらひてよし
なる人のなぐひまれなるほどと人ハ云いへ至
了然禅尼面を焼て法を求む

了然禅尼ハ都乃人にて大内に仕へ給ひしが婚姻乃
ことありて人の媒しあるより子三四人もうけなバ暇たまハれと
契約して嫁しけるが三十餘歳の時まで男女三人
設け丈ありしかバかねてのぞみを云ひはなれて髪をそり衣をそめ
臨済黄檗乃諸禅林に入り参道隙なく務めけり天和
元年乃冬遍参のためとて江戸へ下り井上大和守
殿の屋しきにゆかりし白翁和尚に見へ法を受んと
乞しかバ顔かたち美きなれハ人口おそるゝと退く
しかバ頓て立帰り火撹を焼額より両乃頬に至

ゐぬで焼爛し和尚ゟ參りしがバそれ懇志を
かく感し大法のこゝろあく附受けりし併詩歌を賦
して呈しあり

昔遊ニ宮裡一焼ニ蘭麝一 今入ニ禪林一燎ニ面皮一
四序流行更無レ跡 不レ知誰是箇中移

いある世ゟ捨てらくみやうかくはし終の薪と心ハはりせん

爛れゐる瘢頓て愈てすこしも痕つゐちりしを亦
奇特のこと也江戸ちうき落合といふ所に自精舍
を建立し一乘院と号し尼衆を集め法を説しと也

禪尼面を焼詠歌法を承

ひりし甲州鹽山ゟ法身和尚とて高僧の妹なりし
禪尼ありしがかくよすが智人ゟ超節操たぐひなり
しが美麗のきこゝ有て世乃誹避あがりしさ
師乃宣しるすを守るなひく鉄火を面ゟあて
和歌を詠して

我面恨ぞやくぞ鹽の山海士のたく火と人やいふらん

かく師のもとへ参りあへハ頓て奥義を傳あたへ
して授けたまひし也けり

洛陽高譽上人

洛陽大雲院乃高譽上人ハ説法の大導師にて世に名高き人なりけるが幼き時より書を讀ならひて時の貴僧鉅儒達にも称嘆せり しかるや浄土の奥儀をきはめたるのハ云もさら也天台真言倶舎唯識の精きまで捜求め内外の群典のこらず獵渉しなひぬ三千余巻のなより偏く説法利生を業とし聲うるはしく辯美しくて一度法の席に列する輩ハ郭しと

推き信を起さゞるはなかりし向阿上人の三部假名抄を演べられし時ハ化人乃老婆向阿乃手にいる書したまひける往生至要訣といへる文を持ち来りしとなりしせあるは後九條乃里に庵を結び閑居したまひし時和州當麻寺乃曼荼羅ハ年千霜に及びあまりに損壊して末の世乃結縁もなくなりなんを憂悲とていかにもして補ひけるを度とて延宝五年五月人々を伴て當麻に行きぬ中古源の頼

朝公の寄附ありし御厨子に蓮糸の大曼荼
羅を張置て四百有余の春秋を経ぬれば枝を
剥して往古のごとく軸をつけ巻納んとすれば工
も一向に叶ひがたくて此縁ひ既に止なんとする
せし時夢相の上に帋を張添并乃水を沃ぎかけ
単心無二に祈願ありきしに一夜影出きたる
ありて翌朝自然に板を離れ巻下り一點も
瑕付きたるはなかりし板及び表に張し帋に
本曼荼羅の如くに見し荘厳に顕はれぬ

作りかへ移しまゐらせたまふ兼て粗増に彩
具なれば調へ揃へかの鉄なんどまふ木を綴い
んとせしに何としても色合似ざりし是たゞに
あらずと案じ煩ふ折節徒弟一両人二上ヶ岳に
登りしに鋤を擔へる一人の老夫ありて
語て曰あのかろ大曼荼羅修復あると承しなり
繪の具をのぞむのならばいざ來らせたまへとて一群の
森に導き是ぞ熊野新宮鎮坐しありし
御社なりとてそれよりしるかなる方を取りて彩りの

塊を獲させたまひしをよろこひて礼謝をなさん
と老夫を尋ねしに今までおはしけるが何地へゆき
けんしらざりけれバ餘り不思議のあまり
かくして村里のそこらの人々に問求しかど
老人ハ曽てあらざりしと云ひけれバ是より
熊野權現ハ此の曼荼羅を本地として毎日此の
地へ来臨したまふと傳へきけども今ぞ謂あり
權現の助力せさせたまふ事わすれがたくいと尊かりし
かの補の似けりし色ハすこしもちがはでハなきかやと

件乃塊をもて見くらぶるに少しも違ハざりし前々
かゝる画師坊乃叶ハざりしハ此の奇特を施しし
たまはん御ためなりけんとて孫おのゝ力をはげし
同年冬十二月まで修復ことごとく成就し
文亀年中の覚円比丘尼の願主として後柏原院
の宸翰をなされし新曼荼羅乃再修ハ同年十月
十五日よりはじめて次乃年の午二月十五日の年迄
又かさねて一丈五尺の大變相をうつし未代乃
副宝として寄附ありしかまた重新曼荼羅と

やしきんなるにかゝる變相ハ銘文古例乃ほかにて
いとめでたき當今乃帝の御自筆深くせ
たまふなるまゝに上人おのゝきて朝廷へ許さず
りまかりしかども勅許ましまして震翰の銘文賜
下されぬるや、さるも貴かりき賢聖乃甚に古變
相及び件の新圖兩幅がまさばいろを玉の御冠傾
させ給ひぬ近衛乃左大臣をはじめとして諸寮
百官おのおの拜せさせ給ふとなり天和のはじめ
洛東山科乃郷乃空也上人乃旧蹟竹蔭茂

荊乱を埋みしたまへる乃かみさき様とて本朝第
二乃導師といひ給ひしハ東山西光寺におゐて入滅
すなハち廿一代集乃中の拾遺集にはいりしかたがた
またまたしく年をへてぬるすまゐ、哀れ扇
衆縁をはじめて再び念佛清浄に道場を建立し
させ給ひぬ此時空也上人の石碑門境の所に立ててそ
かうしてよ移んとせしに郷乃老若にしたがひ古の法
石塔ハむかしより近付ものに祟りをなさしめく
發熱癰病狂乱せしめたまひしかバ一人もいくく

やす者ハまへかくすといふことなけれど頓て上人念佛
三昧の窟室にこもらせ空也上人の遺風をしたはせた
まふよしおほく聞えしにそのよしは天下にかくれなく道俗
その名を知り若も他宗なりとも附ハ終身かへて敬ひ
ゆきかんとぎりしかバ群居土民まで貴きいやしきをえらまて
まつりけれど大サ一尺餘の唐壺出しぬ地境の宜
あまた移したるにいぬ一人も痛しきことはなかりし
壺の内には舎利のおびたゞしき事ありて其の内に天下大き
に飢饉しけれども施行都ハ人多きなれども死なず

に袖をひろげて其ひかり求めけるが人は塊を枕として
餓死するもの二万余人に及びしかバかく憐みしく
世乃あはれを見るもの上人の多くに深かりし事なれば悲しく
すぐに大雲院にて引あつく天和二年正月八日より諸人に
すくめ四千九百六十四人非人ひとりにて鳥目十二錢づつ
施行したまひ毎日ばかりの人数積りて二十六万六千
二十九人にまで及びけり世人その志乃堪ざることを感じ
金子五兩十両ハ出ずるもの也何ぞ百両乃金を白紙
にて包み施入したまひ貞享三年の春齢五十八歳

おそくほよちらぬありし寝けるがごとき来迎の瑞
相とゐならひ三月九日数返の称名漸くなりしに
かしらを西になし安坐し大往生をとげられ
けるとぞ

音誉上人自乗火車

増上寺第三世音誉上人は智道兼備の高僧にて
世挙て崇敬しまゐらせける時大衆に向ひて告て曰
我今日遷化するなり疑ふものは皆速に来りて
没をとへしと則ち法問を宣ひ己に時至れりと

て看々天地清濁の五劫境界浄刹の臺三悪
火坑阿鼻の底一機不轉古今の車と云ふ頌を
書して筆をなげすて山門より出らるゝと大衆
不審をなしてみ送りあるに火車の炎の熾
然として雲の中より来る上人手にもてる團
扇にて招きよせそれに乗り移り又大衆に
向て火宅をはなれ出ましく車の上にありて
残りつゝいとも吟詠して西方に飛去たまふとぞ
往生法をとき頓て安養をとげ給ふ

京三条からすま西へ入ル町桝屋幸兵衛といふ者あり
元禄年中のはじめ東より上りし天敎とて浮浪の宿し
あるなきはかしき下女二ありしき者にて信仰なる
故しに後の世乃なるべき當途をたづねて問せられバ
女ねんろなき私日蓮宗なく題目のミを唱しけるを
ねがひいかゞしてもゆき退き次乃東天敎へ向
ひ昨夜俗家りしるに胸ふさがりおもひ寝ずとし
今いとも此の事ゆかバいふまゝてんと楽しみるハ
まさ父母のいふをせよ無ふ不実家なくてかなし候

願ハいそしく清浄しけるをしあしくと拙しけれバ一
天敎いとはなれて仍まいハ安養世界ハ弥陀如来の願
心より建立ありして彼ふ衆の衆生をひきとらせ
まゐる浄土也汝の宗ふ旨題目を崇しけるハ八宗
吾宗の観経ふても為讃大乗十二部経首題名字
と説るをひぬる功徳を以て浄土ふまゐるといはれ
まくらは祖ひるへまきし細かに宣らまししかば
実々の闇夜ふ燈をかゝげたる今たおひけるうちと
歓喜乃涙袖をしぼりぬ年二十六七なく今を思ふか

艶容なりしを愛せしまゝを引入て終に安養しけり
後いりたんやといさゝる大信者となりけるを見て古は
るそし天赦へかへりし八餘りはゝれしさに稀なるかく
貴きものなりぬれは此ものしやとなりし丹後
其妹の姉なりし者なりかくと告ければしにいつ
そかりけるくれかひ深く悔りしてありけり

寅歳和尚金をすて經を修

増上寺の寅歳和尚といへる人ハ学文領として金子
三百両人の好きせきるを私施りとて増上寺に
一切經乃蟲ニ損しけるを裏うちし散雜して見
けれかなしきさまなく補いけるも延宝四年より
同八年にいたりてまて漸く願ひをはたしぬ同九年伊勢
の蓮華谷なりしこもりて隠遁せられし和尚ハ
寅乃歳寅の月寅の日寅の時なり生まれ玉へハ
れきなりより此名を付給ふとなり

善貞法師榮をきらひ乞食す

善貞法師ハ鎌倉光明寺の学侶なりしか後なり
洛陽知恩院なり寓居せられし勝るを妬む世

なか〳〵ひさしく此所にすみかたきのみならず多かりしを憂
るまゝにかへりて比叡山より寺賜りんとありしかば
かくらうを何しき世上何かせんとてやかて名利を棄ん
とのこゝろざしとおもひ定めて餘財をすてゝゆきたく
金三両をもち是は昔年よりたくはへありて伊勢
太神宮へ奉納しそれより信州善光寺へ
ゆきしばらくありて乞食せられしを所の人々情ふかく
あはれみて齋をすゝめ施しはた布施物を備れども
少しもうけぬ事なかりしをおのづから受けて施しくされど

一度の用なるのみにして外は乞食にてすごせられぬされ
様いたしかたなく人ありていほを借して菴をむすび給ふ
せし同國松本より旧友の尋行る僧来り訪ひ侍く
ましみ語りていまもむかし袂を紡ぐ人やありとせしき
善知識にてわたらせしかどの人たちのせいかく計り
世はすてまし事を縁を抜て悦びれし延宝
年中のすにて有りし
幡随和尚邪宗を教化す
九州吉利支丹の宗門蜂向して政庁の妨を

かりの甚しかりければ将軍佛法を以て治せず
んハあるべからずと思召て増上寺の國師と
清閑諸侍りて先そ此の仕遂さんハ諸宗の中に
幡随ありけるに祐天なりしとて上使を以て頼たのミ
祐天和尚かたく辞せられしかとも上使三度
迄ありけれバ若此悪黨退治したまハずハいかゞなる事也
されバ望ミにまかすへしと有けれバ此上ハ是非なく
程なく祐天ハ下向ありけれバ假の堂を
作らせ給へと有けれバ則ち日向國にありける

一宇を造立ありけるが今に白道寺とて世にまします
然るに祐天かくてハとて伊勢兩宮へ詣んとてまづ
太神宮を拝し奉んと山田にいたり給ふに或御師の家
其夜も尊神御夢に立せ給ひ御下向なるも殊勝や
我もちからを添んとの告ありしかハ特に貴くおもひ甚
豐朝佛像を賣者来りけるに持て拜せたまふに
其みてさいふも更なりまことに正しく尊神の
ちから合せ給ふ験しならんとて歡喜し頓て
請したまひある去程にちかいに此くの人そと給きハ

けるに云ハず跡を慕て見しるもの神縁山にふかく
ひとしく行方もしらずなりしかそれより熱烈ハ
帰りきたりせバやとて日向西又下り見えて正法を説
濱邪法を弁南摧きたまひしかバかの邪徒悉く
改悔皈伏して浄土門に入ル者幾千万人といふ事
をしらざりし其中に宗家人ハ正法にかへらうとしさの
ためとて立所に捨身しなれとや和尚わりを
れ給ひ弘通利益して彼の霊像をハ白道寺の
本尊とあがめ奉り又熊野へ赴き給ひて則ち

七日こもりて法施したまひあるに第七日命おハり
たまひしを随侍の大通法師火葬になしたるに
骨ハすこしもなくて平生不離の念珠燦爛として玉
のごとくなる舎利となりてはなはだきらめくに火中より
出たりけれバこれを取て人々あがめたて今幡随院に
重宝にてぞありける

乞食自害して歌をのこす

寛文十二年四月上旬のころ洛東三條橋の下に廿歳
ばかりの乞食の女自害してあるを人々に出て見るに

一首あり
あらしへハありつる種にうき世そしれりへハゐるゑにとふみし
やとありしその都ありかたれなきにて有りかたきこそ
天上の御仏にまて及ひく有る貴き御方和して
あせしあらいて
ゑにしふハ長し短し身におしてもりへハゐるゝ袖の白たへ
又
ゑきと憑るをのゑにしの誠さへきくに泪の袖にけ哉いなる
あり光和尚の徳いふも更なりと此人々ハ泪せきあへ侍りき

霊合山閑唱阿闍梨

閑唱阿闍梨ハ信州綿内村の人也母懐胎のとき魚肉五辛の類を食しぬまとハ何となく胸あしくて吐ぬ児生まてより母肉類を食して乳を與れハ飽て飲ざりけれバ此児直人ならぬとかしこまりましき四歳の時父月代をせんとしけれバ我ハ出家なりとて剃らせじとて三里ばかり隔し村に逃行て自ら童頭を剃りければ父母も為方なくて俊乃年の春同國の帰命山但唱上人の許に

はかなかりしと諦りて剃髪し受戒し給ひぬ
それよりその師に従ふて江戸芝の如来寺に越て
多の年月を経しに師の上人ハ[illegible]し給ひて遷化し
たまひて廿一歳にて此所る思ひしるいたく
繁華の地を離れ名利の便を悔ぬれるやそれ
濃州笠原村に真性寺ありけるを住て[illegible]
千体の仏像を刻み又[illegible]の八幡院にも千体を
きざみて[illegible]六[illegible]おく妻木村の間の山を
[illegible]宗に艸庵をむすひ霊合山と名付て[illegible]居し

[illegible]所持る一物もなくて厳き寒風の時も唯草
かるもの一衣にて念を鎮めて又人にも一向に念仏
をすゝめ給ひき帰依の人ゟ珍味美麺を上人の前に
そなへしかども[illegible]顧ずして一匙をも食し
たまはず[illegible]往還者のためにとてすゝめ玉へれど[illegible]も
まいりきたりける時男女尊人[illegible]寄[illegible]
聖霊のみまへにて出ておはしませし大きなる桶あり
七歳までありしが[illegible]ひしとぞや上人ハ一切の善悪の
境界禅定の中よりそなへしるひしかるふや給ひき

是ゟるまへ川方より宜しくに露たがひ侍らば邊國乃
かゝりしを當歳子の死せるか馬屋のかたはらに
埋めをきしをあるとに上人村をのぞみ家かしこれ
家にて語りき白ふかへりかしも遠くハばかりし何程とき
靈合山に石塔を建んとて笠原村横井保左衛門を伴ひ
又彼より十餘町山の奥によき石まで尋ねしつる
白ふたり人夫ニ三十人もかゝりまゐりしん皆白る几
村の者をひき出て出さんと傾狀しあれど其れ
然る庄郷より大雨して件の大石保左衛門が家の前なる

川に流きまうぬ人ゞ奇異のおもひをなし頓て石塔に
おしてまうり尾州乃鳥頭勘四郎といふ人の妻子
靈合山にまうり詣て貴きまふしするしが一日逗留せ
しうに勘四郎いかりて念て閑唱とやらん野干ぬ出て
人の妻子を誑らかせしぞとしいふるとよんで附納に
女ふりもひひ淡ゝ夫某をふうしくと惡口しける
ゑゝく飯まてしのふかふて女ゝへ胸苑後けまひと語るハ
勘四郎大きにおどろき靈合山に詣て懺悔し
そうとぞうまゝ大信者となりぬ三河國のいかる看念仏に

養慈せしかど薬一服も飲でむなしく酒食を主袖とり
もとより名号をとなへけるども又せめておろか儕のみの
にて跡をとむらひけるに是ばかりは六町まで畠の畛
寸立もなかりしを堀汝の罪の程を知らせんと宣へバ
これは其が地也と云しかど強ちなほさで六十年
の下に屍骸の髮を見付るかなしき損せし指爪半ハ
朽るかなりしをまた見かなりしが私すことも又
かくぞて上人を家へ伴ひ皈りて妻をよびかへる
あはれ係ることも及べきず懺悔せられしを猛く責

ありしハ妻須くむせびつゝきて八十年かの尊
石仏の女なり主乃情なしによりて嫉妬の焔押へ
がたく窃にうかゞひて殺しかの所に埋めかくせし
ぞて地に倒れて悲しみてある上人にかゝりてそ
いと細かに教化し血脉を與へしかば即ち念じて
ある奥方貴き夢見て招きし折ハ上人にかりて
弔べき霊ハあるかりとて之を埋る所をうかゞせし折へ丘
小さき白骨ありけりしうは物ひとへし局赤面して
かくあることしと主人へとかゝりへバ上人へ秋殺へ

しぞ部屋よりはなれて局にすゝみ今ハ娘を二の
はくみたまへん當若殿の誕生ありて一産の二子あれハ
しき何をもと思ひ定め先をかく殺しまいて
ことに埋にかくせしけるが大殿ハいかゞしけんと
かなしくさきしけれハ上人語りて悔やせしより大殿
と教化し給ひの白骨を弔ひ給ひしが
なりし若殿ハゆめにて少人来て我ハそれを兄弟
なりしかとも今度開唱の弔ひをうけ久しき
黄泉の苦患をまぬかれ給ひしと告けるとて

なおし此世又いかなる人の子と成して中陰の母が墓に
開唱と云ふ聖の寺の隣に有りし庵すまひ弔ひを
うけ給ひしより告しけれバ頓て如来寺に僧を立て
招請し給ひしまりてちかしけれハいかゞ歳ゆくへりや
子縁給ひしといへハ先祖の霊よくしまつりければ
さめしまふりて彼らも真をなくして三宝を恭敬
しけれども妻懐胎しぬ二月めくけるが上
人まゐりしけり此児の名孫ぞ悦しく思ひし
ありて男子をうみ給ひしけるが如来寺にて

勧化の席をひらきける所へハ遠近より群集市をなせし
中にも何某が娘七歳になりぬ兄とあらそひきを
見て七せ馬ぬりふしヤア汝が顔が泥よごれたり
馬下が血かり穢なりと罵るを上人聞つけたまひて
あはれなる人よかし汝が先祖討死せしをおぼし
ともせぬ人へハ汝の自の祖父大坂陣に討死せし
に流れ続くしとて頓て血脉をさづけられしかバ
又ある人の娘十六歳まで唖にてありしを上人は名号
血脉をさづけて香華洒水を手向られて霊魂

を弔ひしに其七日にあたる日より南無阿弥陀仏
と毎日云ごと初めとして常人の言舌にかはる所なし
又ある人屋しきを買求めありけれは夜々にお家
の首なき骸足なき胴半なりし沼々の色彩美
形のもの見えけるが居てはまて開唱上人の弔を
頼みせし人へもしけしなくて以後家へ移しやる
ありけるとそひさぬ翌日上人をむかへ法会を
営み移しまて何のたゝりもなかりし後て屋敷
の来由をききしよむかし罪人をためしある場所にて

ありしとなりける人の男子二人聞てやまれい、
隙なく門外に出し性しきるのそいらそかり
独お祈祷しあれど更にやむすゐかりし親悲
しみて上人に許てありまくとかくりあんなむ
祖父母の戒名ハと問せさるへハ更に覚え侍らぬと
答しかハ汝かのよ祖父母中有に迷ひしかど
汝が家にて戒名なきを悲しみ吊を請る便に
なし其の両人ハ祖父母の名をしるの真似するに
それよりも戒名をつけられしより教のごとく信心

はくしあれど其夜よりも件の病人ふいと門外へ
出るよしなかりきぬ相州の百姓勧化を皈依し至
誠なりし先霊を海つりしかば其比旱魃して近辺
の田畠もことごとく虫つきしかどもそれが解脱には
すこしも損ぜざりし又其隣の児夜ごとに
泣ゐて動もすれば何者の所為ともしれず
かまへの外へ這出しし父母嘆て上人の名号を
もらひ守りとしてあれど件のやまぬ也寔
三年の前を相州大山へまゐりしときなり糟谷へ

一里ばかりにて日ぐれ洪水しあふるに上人のみぞ上
二丈ばかりたかく二筋の光ありて闇夜をてらせし
が驛の入口の榎木にかゝりて消ぬ是ありて
大山のかたへ飛行ありて始め信州に幽居をしめ
まへなる庵にて在る民家へ出てもやうしに
跡をねん二三年迄り君あるが夜半ごとに窓の
外ふいとおいれば泣声なり初のほどは友だちの
来り戯れなりとおもひしが何となく物すごくなり
しらば戸の隙より窺ふに裸形なりし男二人

おそろしく立て居よりなくやみて念仏し
あまきハ消うせぬ上人暁にいたりて村人をまねく
と語りしにそれをきけバそれハ此家の屠者の亡魂也仏
菩薩の嫌ひし獣肉を人よりかへて只ぬりし血脈を
深くふかく乃不便なるとて血脈二通相そへて人を乗に
したがひて遣ハさせしに村人穢多村を行きて
くるしく弱りければ音に聞く川流の馬の皮を剥
ぎて両人の流ありて亡せりとぞ此ハとて
件の所を得しを述血脈をさづけて裸身なる

ありしその不思議なる事を語り合て皈しけるの夜
村人の夢に或人来り貴き血脉を授させ給ひて
苦患をのかれ侍りぬと告られしとおもひし霊合山より
十二里隔し東下と云所に孫助といへる貯なくて
乏しき者上人へ詣で教化に逢べき便もなく
して只明暮なくかなしみて居たる日山へ木
を伐けるが何となく頬にねふくて斧を枕にし
臥たれば上人血脉をもて来り給ひ汝が志
いと妙なりけれこれを与ふと宣ひて給ふとみれは

夢さめぬ孫助かゝりし事を怪しく思ひて宿
に帰り此あくこれより拝し奉らんとて垢離を
とり居るにある所へ村の者来り昨日霊合山へ参り
しに上人机に倚玉ひしかとも汝が村に
孫助といふ貧人ありやと問せられ其者に遣はせと
授給へたしかに届よと賜りしとて血脉を
さし出して孫助に渡しあるなり菴室の下に二丈斗
乃大蛇経し参詣のもの共怖ろしくて出ざるを
免しあへざるよしその人ぞきたりけるハ上人の膝を

枕こして臥居あるくちかりける時めしけるに八歳
墓所を通りける人見へて男女の老若は
そきくちかりしが長一尺ばかりなる幼稚の姿は
これ姿にて有りしと貞享元年正月に梵網經
を演らまし二月二日に講おはり三日より八業門を
固く閉参詣の人ともそこに先沐浴剃髪し威
儀ことに正くて佛をおがひ端坐し弟子依心
より只今往生するぞと告高音に念佛し西向の
偈を唱へおはりて依心より十念をさげ息とく

きゑひぬ村人うかゞひて八幡院壽唱にかくと告
あれば壽唱おどろき走て来り壽唱にてありしが
御心よりまさりしや御臨終よりかひまなけるを
乃かなしはふて泣あかれしが上人まちかねて眼を
ひらき前に来れとのたまひく十念を三声授け
て合掌のまゝそのまゝ定印をむすびて寂をしめさせ
きゑひぬ春秋四十九歳なり

順西身を責香烟佛を現ず

常州江戸崎大念寺のちかき所に住し順西と云る

法師ハ生まつき究て正直なるうまれにて人情を
飾しらずしてハ露ほどもかざりし平生丑寸れ
刻ぞろりよ起て念佛を勇猛にはげめしかし
起げるおり鴉の鳴にいまだばかりみえせん
て曰く沙門の身としてかくまで寐て大切の勤
行を怠りしるれ不届よ是に依て今日ハ食の
を絶せんとて翌日まで断食しあり其日他
出の時ハかならず扇子二本をもちし一本ハ清浄
扇とて礼佛の時ならでハ用ひず又いかなる時の

雨雪の時にも蓑笠かくて歩きし人誹りて
問ハれまいらせ天より濡しよりければこそ雨雪
を降らせ給ふ照しよりければこそ晴させ給ふ
なるを私の了簡もて蓑笠を着てよけんとするハ
天の命を僻ものなくれバとて一生ばかりに徹て往来
せしとかやり六月の炎天にもたゞかさ笠さへかぶらず
しと聞し紛なり在住の往人をすゝめて丈六の
弥陀尊像を造立して常香を薫なされし御
ある牒子にいかゞかり香炉を作りかくなて自

然るに弥陀尊影出来させたまふハ又程ちかき金井戸
といふ村乃百姓の家にありて通夜念佛せしに
襖障子にありて忽然と丈六の尊影あらハれさせたまふ
て今にありける時順西が左りの耳俄に聾て
良ありて頻りに鳴しとて抜きければ何やらん
物の出るとしを見しに小ちき臥形の佛像に
似たる舎利にてありしき

三海上人雨を祈りて雷を鎮す

下総本栗橋行念寺の開山三海上人ハ木食にて
竹林の中にありて三年がある起立の行をはたせし湯殿山より
年詣でしていみじき高徳なりてありしき下野の
壬生乃邊三年うちつゞき旱して里人甚だ困じて
しけるに上人を招き雨のいのりを請ければ祈祷に
およびいかなる旱魃なりとも雨降らずといふ事なし
と宣ひしを妬しくおもへる僧多かりし上人七日
断食し丹心を抜てあふなりし第七日にいたりし
うちに何の志るしもみへざりしかバかの妬僧ども
傘をはりし木履をそへてきいろく来りてさゝくしに

嘲哢しあへりしまれ刻ぐもりとに晴天にはかり
黒雲おこりて雨車軸を流しけれど波傷丸ハすて
ぶせりて飯りある又幸手の沃りおりてありて雷
神を鎮しまひ社を造営なしましさの庄紬
そし故ハ幅ひろかりしを庄屋より年こて盗
旦しあれど上へ申すあひていそてかくハせしぞ
地を復すべし若さあらくハ雷の祟りに合せんと
示されしかどもすらしもおそれく許色もちらりし
うば悔りおもひおもへせんとて祈きしてりたちやら

雷電庄屋が家へおち鳴わたりしが其七日七夜也
庄屋十方にくれて身をふるひ嘆きかなしみて一向
にたのみ先非を悔しかバ此上にぞ祈り飯されし
となり

父誦經娘咏歌

遠州中泉より一里ばかり北南岡田村の鈴木理太夫
ハ三千有余歳の比より阿弥陀経を讀誦して
日夜おこたらずとゐるあくまで砂をもて数をとりまいらせ
修練しての後ハ睡眠の間といへども唇の動く

る山ごもりし黄檗山先住猶湛和尚初山より閒居
し給ひせし附人を記捌念珠西方往生の
人なりけるが池に出したまふ余楽の秋いたりての
おしもなくて秋は出でて往生すると座して登り
安坐し黒然として逝去あり法名を大含と
号す生前誦經の數凡千万巻也とぞ二男二女
ありおのおの抜羣れて才智藝能ありし第四の娘
なる教へけるより幼稚の時より佛菩薩を崇
めて妙法華經をよめり又和歌を好めり大内の

所内三位惟常にもいたく称美したまひしとぞ
亡父の追善あり
いとせちにてよめる歌をきこしめしいたくあはれみたまひけり
武夫姓を重んず
水戸の家臣中山何がし従者に扇谷八兵衛とい
ふるありけるの主人の刀をもて人不意目に逢て
縫刀を盗まれしか三四度迄ありければ
せめてしかば自分の刀を売りて金十両を持ち
せんとてありしかどなほ命は失ふともゆるさ

まつへと辞しけれども主人立腹甚しくして閉
門させられしてけり心せまき傍輩ともかくひそかに
すでに粗増ハいきせ故けらんと詞をちかひく
たつはあれども左ゟうがゝらん自ハ上杉憲政
れ嫡孫にしてその刀ハ四代おもむきし扇谷乃
姓号ハ鎌倉乃假住せし在名なりとかへて
くいしかけす主人もひそかにゆかしを思ひて
ひそかにせり出し事ども委細を問ふ主人ても
頭をならしへずそれ過き宰相公きこしめ

て八家を下座乃置あるや上座に招き問よる給
らかしれの比ありけてなしあれども八家ちから乃
辞退をおしく上座になせり委細ありけしかん
宰相公も對座ふくし逢ひて古然の結たしく
りり頗比の内の在宅ありともて家縁下過き
なまもて二百石まめありしとなん

起誉松を植蛙の喧く鳴を咒す

大坂谷町すし八町目劍生寺起誉ハ随くか乃
念仏の導師なりし公事本ハ浄房にてけげのふ

三間四面のかやぶき乃一宇を所持せしを今ハ仏殿
方丈庫裡まて悉く成辨し今てありこの修営乃
そのかミより根なき松を二茎門境ニ插をし
寺門繁栄せハ此の松盛長すべしと自祝せられ
しか果して欝茂して今大木となれり又境内ニ
閑居の菴を占なりして庭の池の中に蛙群
鳴て喧しかりしかれど十念をさづけて停止せら
れし后生涯のうちハなべて鳴ざりし元禄九年
八月十七日卒す葉ハく頭ぬ滅後の葬式を営こ

前十一日より安養の聖衆の數かずみへるをえ
て貴く念仏してをハりぬ

安藝以八和尚

藝州廣嶋光明院の開山以八和尚ハ奥州磐城乃
人なりその母子なきことを憂て辨財天女ニ
祈誓して桶ニ水を入て頭に戴き足を跣て
月影をうつし宿しけるに奇端をゑて誕生
しまちに後ハ出家しついにひろく德をかぞ
かりし加藤式部太輔某の八不信人なりけるぞ

いざや僧を試んとて招請なして斎を設けて
家主二人相伴なしてかの饗応なせしに
魚鳥を料理し數多なる女子のうち只美人なる
羅を着せて給仕なさしめ地の隙より窺ひみるに
かの和尚自若として更に眼を閉るもなく
料理せる魚鳥ハたちまち飛躍り給仕せる女
子ハ看る〳〵骸骨となりぬ主人大ひにおどろき
おそれ即ち改悔發心し是ハいかなる事と
たづねけるに和尚教化念仏なりしと答へて其

又或處にて人を招きて宮嶋にて経巻を占
らる處に美麗なる女十余人随仕しければ
誹謗をなしけるを聞て有て法談の席へ
呼出し縁にて其身の罪をさとさしむ
其の又秘めしことなく急ぎ此席を立退べしと
ありしが海上にて波浪起りて暴風すさ
まじかりしが舟中の人々肝をひやすやう
なりしも竜鱗なりし容たちまち蛇形となりて其
雲をまき上りて海底に天女なりける

童子となりして給仕せしめたまふその比府初て
ましくのや其後一千日の不断念仏を修し玉ふ
八百日を過ぬるころ嵐鳴乃社人たまたま數人
一様に夢の告ありて残る所の二百日ハ社内にて
修しめ給へきよし示現ありしより度々すゝめにおよびし
しかバ此上ハとて此の別時念仏を社内にて行ひ
給ひけるが又百五十日経て和尚おんりをきゝ一霊
夢の如くに秘の回向の日ににはかに往生すと云ふ
ゆかりしかば遠近きゝく道俗貴賤ぞよりのまゐりし

其の日も日中にて群集の者ありしか十念授
申て大往生をとげたまふ時に紫雲西方より靉靆
天華妙香微妙なるのみか他さま〳〵の瑞を現し
けるを舎利遺骨をひろひ取て結縁せんと待かまへる
に俄に潮みちきたり一点の餘灰をもとめ〳〵
皆海中に流されしとかや龍神の供
養せしものなるべしと相くへて貴し

伊豆郡往法師

伊豆郡往法師ハ豆州の遠近にて長くその名を

名あるとやしきにいけり乃比よりまの縁をはなれて海なり
真鶴の五條甚左衛とよぶもの、船頭となり海へ出けり
海上を家として世をわたりけるに二年以前の秋頃のこと
風雨しきりにしてすでに船を破却せしを漸うにのがれ
わりなき辛き命を免れぬその時ぞおもひけれ
其の身を養んとてかくはいやしき業をなす事の
誠に拙きわざなりしや今よりして緘を立取つて
飢渇斬害ありともその身の罪を消ゆべきに
はじめてしきしく自誓を立ておちく念佛門に入り偏に

西方を願ひけり鵠の岩屋とて海辺ちかくありける
はるかなりしかば人の通ひもなき所と見立てここぞ
究竟の道場なりと一椀の飯をもたずして引籠りぬ
甚だしきハかくとして名々いかにへもしやと
疑りあへりしかどもはるかにすぎしかばいかなる
海底の藻をもて不便のためにのみひろひしが
殺生の後鵠の首をもつてしハ去ル頃岩屋の
口つりきれこそのありがたうしてせしにあらずして寂しきのみ
けふ人おりてかぎりに念仏しありける貴く

て寔人ハいさゝか食物を一てだにくはずしておはりぬ
念仏乃声ハ絶ることなかりしとかや是より後二千
日の回向をはじめられしより毎夜竜燈三ツ四ツかゝり
しかバ何事かありて吏に申しきこえけれ浄人後の恐
をおそれて此護の小田原の城主へ許へ訴へけれバ此
小田原より二三里ある松田の浄源寺とて禅寺なり
悪心乃作の弥陀尊なりけるが往昔の義に如来いませ
給ひて鵠の岩屋即往が許へゆかんと告ありけり
數度なりければ拍手がいそぎ檀那の面々

ありけるとかやされバ又ちかくの人々も件の仏像を秘蔵なり
それを頂てかの本尊とはじめし如来を贈り奉りしに
彼乃山中の宣ありければさてハ雑夢ならじと云ければ
ら浄人へ答るしるしの尤詳なりかくてはたらき
安置しありけり此とき始て如来より法名を給りしとぞ
即往とよびありけり三千余業の中をつき不思議岩屋を出て
赤澤の海辺にありいふなる庵をむすび初念仏
ひとへにあだ念仏しけり村人集てきてなにど尊き
大法師とて日々食事をたてまつりぬ岩屋の本尊なるぞかし

佛具ホハ浅人の衣からひをしてほとり近き浄土宗の
西念寺へおさめありける時赤坂の平井くりふ竊に
熊野權現宮立せ給ふ本地阿弥陀佛にて白く
ありけるが夢に異人の出て告させありしが默止
がたくて結ひし卽往の菴をいとなみ給ひけるとき
抹香とてしるしあれども内にて焚の茶の湯の物なり
ますと心ゆるらちすまれどいくらでも物の當り
かくさとりふ取なかはへれど足たりの輛かりけて
玉の管なりて觀音の靈像海しくあり法師是

もとめさせると思ひて居たりし翌朝一人の沙門来り
私は伊勢國の使僧也昨夜の夢なりやと宣ひてもちの
ちくらせさせたまふ又ある時何者にても來れば芸きる
乃供物まいらせんとておもありしを何心なく受取て
祝福てしらきこれを悉く舎利にてありけり伊豆
相模の飯室乃言僧をむくひて請ひてとらしめ法論
しるひありにあまも舌をふるひく皈りける元禄
十年ヲ箱根塔峯の蟲辭上人にて念佛の甚
秘を述ヲ給りなへり今は起り二十九日ほどて遷化と

云し故齢を考へしに八十有餘なりけんか
五十果なかりし面相なりし此後一両年経ていと
貴く往生せられしと也

山崎宗鑑

宗鑑法師ハ近江源氏なる佐々木の一族也志那
弥三郎範重といひし近江の比六角なる甲賀山
に篭り居しに将軍義尚公軍勢を率し
御進発し鉤里の陣中にて薨し玉ひたる時範重ハ出家し
供奉せられしが此時をしめて浮世のはかなさを悟て
頓て髻を切り武門を出て摂州尼ヶ崎に閑居せられしか
後に山崎郷に遷り蓬窓の中に風月を弄ひ
滑稽の名を富り筆法ハ一流の祖となり唐土の
人の遺跡を着て瑠璃の金紙を置たるかことしと
誉しとや夜も油盞を灯て世わたる業とし
朝な夕なにハ鳥目十銭でもとごろりねむりしと也
室のハ菜権一ツより外ハ畜る物なし額に掛られしハ
上客ハ立帰り中客ハ日帰り下客ハ泊りがけと書れし

戯僧遺書

泉州境の真言宗の僧ありて酒を嗜て酔ハしも卒し
れ経ハよみくて戯言のミなして世をわたられし
然れ共泊然としてすぎゆきて祈禱なぞかゝはらぬ人と
崇ミし此僧身まかりて後遺封をひらきたるに寺
と書籍とハ甥の僧ニおくる金三百両ハ葬禮料に
得さす出家れ財宝ハ禍の基也衣服ハそれ／＼に
あたへよ辞世あり
世の中ハさめのく衣てちんくでうき縁にふる松風
木村長門最期雪操

大坂の城今を限りなるべしと木村長門守風呂に入り
髪をゆひて伽羅をたきしめ附江口の曲舞紅粉
れぬれ朝と謡ひ餘念なく小鼓をうちまし戦をまちし
次の日わかやうあり討死せまし印を大将軍
家康公御覧ありて涙流させ給ひ此若者討死を極め
髪かり香をとめおかれし月代を剃ければと仰られし
とりかゝ附髪をすき香を焼し女ハにかゝりて木原
意運とふ外科の伯母なりけりし其後まで常に
かたりきし

不破万作戀情

関白秀次公の寵愛の小姓不破万作ハ容顔
艶麗にしてちかうじろうりし一度の笑あり百の媚ありと
いふ容ふものありさまなりけん殿下伏見の御殿にあるの
清水寺にて供奉しあまたの侍あるかりき也にて
と何の武士威儀をただしく行列は陌に出て万作も随身なるお
ともひとりの万作御供の礼をなしてまかりつる
おなじくは万作その日に思ひよらず譜代の侍者ども
ありしが中に若者ありてつくづくと見そめて

まゐりしけるが京の上洛の供ぞ侍の者を伴ひけるに
見届る跡を追ひ御泉水のかたへ賤き家にいりぬ案
内してひそかに密談しあれどもかの者思ひよらずのの
おもむきなれば彼は推て問しかば実に左
なきものにて侍りしや涙袖をしぼりて語りけるは武士は何ぞ
はくみちきん自らハ西国の何氏に仕へし卑き武士にて
て侍りしが去ぬる浪々の身となりてよりしかしも
殿下の御階を詣でしに君の御姿を見そめまゐらせ
しのびまゐらせしより夢現にもわすれがたく

さりてハ御気色(みけしき)かはりし又御くやしきてましけれ思ひとられし
けさんせてはまおかくまへれいゆるゝともかくすて憂目(うきめ)見せ
たまひけりしとうらむかくがくつで申しますを委細(いさい)に
万作殿へ告(つげ)給ひしかバ万作殿も恋慕(れんぼ)の情(じやう)隔(へだて)なく給石(ゆすら)に
明くれもかほしかされりんへ平生の御精(これ)ゆりとはりなく
旦夜後用の扱ひかくに様(さま)しく出まし給ひてらに玉章(たまづさ)
結ひそめまして又おほきとへはいさめしに、かの者拝(はい)し
又其より至りさ貴き胃(そく)山(けい)迄(まで)り一夜も千夜も待(まち)
わびしに頃の日御精(こう)所を定めて殿下(でんか)出御(しゆつぎよ)あらせ

万作殿も例(れい)のごとく供奉(くぶ)し其夜ハ晩(ばん)におよび
還御(くわんぎよ)の時万作殿俄(にはか)に腹(ふく)いたみ給ひて石山寺の何がし房(ばう)
にとゞまらせ針灸(しんきう)などしけれどもこゝろよくならせざれば其
祝儀(しうぎ)の献酬(けんじう)とて典薬(てんやく)がこれぞ薬とて盃数(はいすう)献(けん)じて及(およ)
びしかバいたく酔(すい)ふしたりしが万作殿ハ夜ふけての粗増(ほゞまし)そ
法衣(ほうえ)を纏(まと)ひ窃(ひそか)に閨(ねや)を忍(しの)び出て勢田(せた)乃橋(はし)迄ゆき給へハ
かの者菰(こも)を被(かつ)ぎ欄干(らんかん)に倚居(よりゐ)たるに間(ま)もなくよらせ
いと清らかにて待(まちうけ)おはせあり殿下(でんか)にハ法衣(きじやく)にておはして
御近臣(きんしん)上田主水正(もんどのしやう)を供せられし万作が気(け)いろ、

かゝるん又便け集まとの内より意にて勢田の橋ふるを
飛せあかり悟しや蘭奢待のかほりしける香末ハ
余人の再びなかりしいふ秘法妙薬の万作度とて由
ありんとおりし数十の従者を路ありのこし唯一孫とし
薫り坊しいまだ身へハ欄干のかゝるに人影見ゆれバ
主水正たるかぶり呼ていそくきたるハ万作成らん
右方も左より従て後いとしいふも由ありんと笑て
待りし清おいよろしくすへしとて直ちり馬を返され
しハ万作度の母なりしハ汝ら志の程ふかく感ししく

すて契りし君の心いかばかりなんこれみなくん慰めんと
て肌の白小袖を與へ石山にゆかりあるひぬかの者生前
の本望今こそ満足せりさりや活て何かせんとて腹十
文字にかき切り身を蒼海に沈めしが不思議や
尸骸水に上り流れて志賀の浦なりにつきしかば浦人
出あひ異なる薫しありとて件の尸骸をひきあげ
年壮なる男の大刀袖の白衣着なりしがふとして
あくりもてさやせしは万作度きこしめし
急ぎ従者に仰せつけかの尸骸を見れバ志かゞれ

里寺にて葬らせたまひぬ後文禄元年に秀次公
養父秀吉公と不和になりて高野山にて御生害
遂られし時寵臣の面々死出の御供すさんとて蟄居
ありしに汝らおもひしは此時なりと申せ
ども上意ありしかバおのおの黙しありしに万作すゝみ出
ていふやう上意を辞せんとてあくるの時御悔ことも
言上しけるまで恩君の法眼をもたまはりしかども
なりしと涙を咽びあれど殿下とも御袖を濡し給ひ
ながら此所の局房の側にて次ぎて委細をぞ述べて

世の人涙しとなん

新著聞集

勝蹟篇第六

江戸桜[illegible]
文覚舊跡
尾州生灰川讃談橋
奥州蛇塚
伊賀國兼好法師塚
判官屋敷苔蘚の渕
信州七嶋犬房丸塚
信州洗馬薬師長廊
紀州車塚
出羽蜀山嵓中大蛇
甲州祐成寺の来由
下野古河頼政神祠
奥州信夫文字摺石
信州諏訪七不思議

奥州外濱扇風呂由
奥州霊池示願成不
日向釈帝石の文字
阿闍梨池桜ヶ池祭礼
天狗一夜造法燈寺
芹川千代古道本説
尾州琵琶湯出異
伊豆洞中佛像放光
頼政蒲前伊豆旧跡
錦織寺号由二錦織堂
信州駒嶽化馬入雲
九百年来貴家

江戸櫻田

江戸桜田は虎の門より愛岩の辺りまで田地なる畔には桜の木いく千万ともなく植わたし田の中に流れたる川をとりし今の源介橋と申そ称りけるとかや

信州洗馬薬師長廊

信州筑摩郡洗馬に光輪寺の薬師如来を今井四郎兼平ふかく信仰して日参せられしが風雨を凌んとて居住より道一里の間廊下を造り続けしとかや

礎のミ今にありしとかや

文覚旧蹟

信州高遠の文明寺今峯山寺と云寺の不動尊ハ文覚上人の自作なりと云り建福寺又ハ獨鈷水といへる井ありこれも上人のほりたまひしとかや常恩寺今ハ蓮華寺と云これ又ハ上人の塚ありし所にて名高かりし寺なりしかや

紀州車塚

紀州高野山より熊野へ至る岩出村の神光寺ハ昔大儀の虎尼が成て熊野詣でせしに車を曳岩出村よりして限りて煩ひしを邊ちかき發心者此様を見て今ハ權現への志も叶ひがたしいと哀れのことて熊野三山の体相を画て拜せらしてまかりき結縁の為なりけるようてまを合せ涙ながらに經を誦し念佛して弔ひ空しくなりしかのなきからも車も共に其ところに葬りつき込しより車塚といひし里人もあはれに哀なりとおもひしより三熊野を崇めしまつり件乃發心者の庵を神光寺と号すあぬかの車にハ妻の十郎

る形見の太刀をかの寺のあとに納めて宝物となして
今にありしとなん

尾州生炎川讃談橋

秀吉公小田原北条退治の時堀尾銀助とて生年十七
歳なりける人かの所にて駈むかひ討死しけるに其の母獨の
子を前立てかなしみの余り菩提の為とて尾州熱
田の町はづれに流るゝ川に橋をかけしなり是を生炎川
讃談橋といふなり

出羽霧山嵓中大蛇

出羽の國きり山の城は大蛇巻居て是を繞りしとむかしより
いひ傳へしさまが巨巖の真中に橋長く竪て四寸
ちるまでは[illegible]ふるばかりにて其のまはり垣をゆひ注連をかけ
なれば昔より内をうかゞへば黄色にて石疊のごとくなる
鱗の生たる蛇はひて隙なく回りけり首と尾とを見し
人はなし鳥井左京喜殿かの所領地しけるとき
家臣高津[illegible]といふ人在番にて越しけるが
見侍りぬとかたりまし

奥州蛇塚

奥州二本松領塩田邑といふ所の明神において或人
三尺ばかりの蛇を殺しけるに夫より蛇群り来り
おのれと腹を噉破りしそ一万ばかりいやが上に
重り死しあまりけれバ所の者に埋てしるしに蛇塚
とて今にありかの殺せし者ハ程なく一家ことごとく
ほろびはてけりいかなる悪縁なりけん

野州祐成寺の来由

かの饒俗独立の境界にて襁子を肩にかけ相州箱
根山をこしけるに日景いまだ午の刻ならんとおもひし

きうり俄に日くれ黒暗くなり目指もしらぬ程なりして
一足もひくべきかたもなくあたりひなくして是非なくて
と行る木陰の石上にてしばし心をしづめ佛名を唱ゐる
遠方をみやり究竟の壮丈太刀をさきたる
るのわら草鞋をはき松明かかげて一文字に馳来る
跡よりつき若き女かけくれじと走りきたり
君ゆゑ壮夫のいふく法師ハ甲斐國にゆきたるな
りき信玄に傳言すべし通しるなにがし某ハ曽我
祐成なりしと言ひきなる妻乃虎信玄ハ我弟の時

宗なりかきハ若年より此山にのぼりて佛經をよみ
佛名を唱ふの功つもりしかバ小将にえらびしも今名将となり
かまふれハ人々崇敬せしも又仏道にたよりていさしき
かりなかくれわもし某ハ恩愛の纏縛にひかされ
今又黄泉にたよりし三途のちまたに迷ひてかなしミハ
修羅闘諍の苦患にもやあらむ願くハ我為に精舎
一宇造営して菩提の為回向たまハれといひけたる
次しかバ傳のいかく安きにも事に傳ひしかど證拠なく
くてハ疑ひいかゞかんとおもひあれど是たれなる也とて

目貫所しをさびしきまをお尋ねしたまへどといもかへぬに
晴天にわか白日かくれて人馬をへだせてあり僧思ひきかなて
甲陽に越てねたましくれ便をえて信玄へかくとせめし
しかバ件の目貫ハまさしくて不審きハまりなかれて
秘蔵の腰物なされたまへバ片方の目貫にてありし
かバ是奇特のことて傳り褒美ありて頓て一
宇をいとなミ祐林寺と号たまへりまかしより星霜
良古て破壊ありしかびしかバ元禄十一年にいたり
きうくの縁起いひ連綿武江へ再興の執ありしの

松平摂津守殿きこしめされ武田越前守殿へ下知有
ければ忽に掘出しけるに其の目貫あり其の腰に
のありしとて世にあらはれ金の蟠龍あるよし

伊賀國兼好法師の塚

伊賀の國阿拝郡多那尾村の内國見山に吉田の兼好
塚あり其の墓じるしに松の有りし寛文七年に土民ども
塚をほり崩してみれば骨壺ありけるに刀をもちし
それより下に大小の瓶二つ有りて中に骨を納めたりし
此の村中多く煩ひ悩み神子をよせてきゝしに

塚を崩せしとがめなりしと云ひしを地頭の家老
兼好の墓なればとて旧跡を容易に堀べ
きにあらずとて本のごとくにおさめおかれしに洛西の
双丘にも兼好が墓ありしとぞ兼好の家の集に
記されしこともあれど其の比乱世にてかゝる所へ
はうむりしやらんいと不審きことなり

下野古河頼政神祠

源三位入道自害の時郎等にいひけるは我首を
取りて隠しいづくへも持ち行くべし我なからんと思ふ

取りて験とふせんとて自害せられしと遺言す
依りて壺なりとて諸國修行せしに下野國古河
にて休をたくんとて結ぶに件の壺ありけりしかは
則ちその所に葬りて社を作りて頼政明神と崇め
今にありその社の額を蜷川彦左衛門殿書れしに
明神の明の字の月は筆畫半月なりかれし意
いふ字の付まりに合せて名句となせし
出て書して自讃せられしとや
判官屋敷菖野乃淵

奥州磐城の國菊田郡泉村に判官屋敷とて百間四面
くるまの築地の跡ありその内を耕作すれば崇を
なす往古磐城判官正氏といへる人住居せし地也海を
召仕ひし菖蒲といふ女身を投し海なり其女の名に
よりて菖蒲が淵といふ此所ハ潮のみちひきあり干潟
淵の底をみれば石の上に皆あり菖蒲多し
投し時もち捨し皆石となるといひ傳ふ
奥州信夫文字摺石
奥州信夫郡に信夫文字摺の石あり福島より二里

さかり行て瀬乃上といふ所乃山の下の畠にほりし
石の面を摺てあれどもゆかりなる親族乃形なく
さて人々かのまりて田畠の損亡多かりけれど今ハ
其の畠の中に埋ミおきし

信州七嶌犬房丸塚

むかし曾我兄弟夜討乃時五郎時宗生捕れしに
祐恒が子犬房丸扇にて五郎が面をうちけるを
右大将きこしめされ誠なる哉兄弟が振まひ程に
かゝるはしきかん犬房が十歳なりながら親の敵とならん
者の面を搏ことはなすや武士のなきに蹤にありがたき不覚人
乃者我召仕ふまじ叶ハしいづくにても七嶋なれん所へ
遠流せよとの仰せ遂に遠流されし七嶋とかりしハ故ある
なりや幸ひ信州伊奈郡なりける大嶋狐嶋殿嶌
小出嶌福嶋飯嶌松嶌とて一処にあひよりしを
上伊奈郡の内小出宮田諏訪帯本中越二社を治親
五卿とよひを西限なりけり左遷せられし家来
棠木城氏三人慕ひそひまゐりてありし犬房ほめとり
赦免ありしてその後ありしを小出將の上なる山際に葬る

其の塚より燃るけむりむかしより今に至て絶ず
殷太房の末葉ハ近比まで有しかど棠木氏ハ今に絶たりし
棠木氏の跡も家ばしら残りなく侍りしとなり

信州諏訪七不思議

信州諏訪ハ無双の霊社にしていと貴き事多かりし
中におゐて七の目出度事ありしをもて七不思議と云伝へし
一 御占の祭といふハ正月元日に神おゐて諏訪の氷に
穿ちて蛙三ツ出るを神楽として禰宜の役として
うゐを取扱ふものも神おして後へまゐり御宝前と白す

の矢を作りて是を射るものなり長官出たまひ蛙ハ
國家の悪魔をまとめ降伏すとて件の矢を切て捨る也
一 三月酉日二ツあるときハ初 三ツあるときハ中の日に行なり
俎ハ面有り鹿頭七十五備へまゐるなり其中に左の耳
割たる頭のかならずひとつあるときハ是を別の俎に備ふるもの也
一 七月廿七日御狭山祭にハ必ず三光の拝まさせたまふべく
一 御渡りといふハ湖水一面に氷て四日めに下官の
禰宜見てゆくに氷の上に一筋の道をあける附て
御渡りといふなり其の後令中ゆるすなし 武井左と云

林庄寺の此二ヶ所の内より岩崎をへて上ハ諏訪乃内
衣裏ヶ濱と衣ヶ濱と熊穴寺の三所乃内へいれまいれ
取ても参りよき也御おりまし霜おれ須磨の内竹が
鼻と四王ヶ崎と南古寺の三所の内へいりまきにても御おがり
ましまし衣裏ヶ崎より竹が鼻へ御おがりハ國土安全
おがり衣ヶ崎より四王が崎へ御上りハ中年也熊穴より
南古へ御上りハ大吉なり
御接ハ又小原山にても取て種なしの麻の生ずるなり
一葛井乃池乃奥何事も片目にてなりし名ハ何先ぞんじ

件は不思議の内なり又おのく不思議の事にて
なりし又八石七本とて霊物はあり八石とハ踏石
硯石尾懸石此三石ハ社内におり亀石ハ千野にあるなり
御雀石ハ矢ヶ濱なりなり満珠石ハ大和れ濱なり
蛙石ハ有賀峠なりなり千珠石ハ礒並辺にあり七本で
いふハ橡木あるなりなり楢木礒並辺なりなり柏木
前宮なりなり檀木社前なりなり辛夷木前宮にあり
根入杉とし柳とハ大祝乃小路なりなり
奥州外濱鴈風呂由

秋雁の口に含み来る木を奥州外ヶ濱に落し
ときは又来りて其の木を含て帰るに残置たる
木多くありしを是を拾ひあつめて風呂を焼て施
業とし諸人を沐浴せしむるにかの飯にして
捕まへ又ハ殺せし雁乃弔ひにてかくするなり

尾州琵琶嶌古跡

太政大臣師長公尾州愛知郡乃東井戸田に左遷に
帰路の勅許ありしが新道名残を惜て古跡
乃里まで来りしも哀れなりし思召されん

はせたまふ琵琶を形見なりとて置たまふ遊君猶あひ
慕ひまゐらせしが世をうきものとおもひわびて
別れは惜しきものへつかれて三途川とも云渕に身を投しよ
一首の歌を琵琶乃甲に書付てかのちか川に身を
投空しくなりしをきゝて哀にしめて琵琶とともに
塚を築きてしるしとし琵琶嶋と名づけし又古跡と
なりしハむかし私にも人古跡を作りしなりて
國の名物貢ある其へまゐりしなりとなん

奥州霊池示願成不

奥州南部領奥瀬郡登和田池にハ南僧坊といふ
大蛇すめり何事にても所願の事ある時ハ此池に
刀脇指小刀なとを投入ぬれバ成就するにハ沈ミゆく
志ざし中ならぬ時ハ水面を流れゆき一向叶ハざるにハ
水上より飛出るなりけしより今に至りて稀なる事とし

伊豆洞中佛像放光

伊豆浦の下田より一里ばかり隔てし白石村の海辺
に大なる岩窟ありし三四月の比の潮の干を待て船を
窟の奥ありて其の奥を又探るにみな

窟の内に三尊の如来たゝせ給ふ尤大闇なれども大
光明かゞやき鮮にて尊容たがふ事なくまします

日向釋帝石乃文字

日向の國八幡といふ所あり八幡の社あり社前に釋
帝石とて面盤三丈ばかり撲る事の大石なり上より
下まで幅七八分ばかり破れ其中に朝日あたりて
見るれば文字あり　昔有霊鷲山説妙法華今在
正宮裏顯大菩薩とあり三分ばかり見ゆるのみ
世談にハ昔在といひしを誰も昔有としるせし

頼政蒲乃前伊豆旧蹟

伊豆賀茂郡河内の山乃堂にいにしへ三位の局と蒲乃前との木像を崇し所也頼政討死ののち後蒲乃まへ尼となりて此所にすミ庵を結び菩提をとふらひし

阿闍梨池ならびに池祭禮

肥後乃阿闍梨皇円坊とやすいはかしき天台の学匠なりしが成佛の疑ひ定りしたまひそずして五十六億弥勒乃會上に詣てんやとして長寿の蛇身とうけたまひ遠州笠原の庄桜ヶ池に栖しみふをおち源空上人哀れたまひし

たましゐして櫻が池乃主となりたまひし信州善光寺に詣でまゐらせんと誘しきを彼乃主謀てさもさふらふにや彼の佛殿のまへ俄に池出来たりけるにきに毎年の正月十日のうちにかならず

毎年正月十日より二月十五日までハ水潔く清浄ありて此日が為は寺内門前まで阿闍梨詣でとて門戸を閉ぢしを君ならぬとかや

又同國坂木の内ひぶといふ所に大なる井あり四面巖にてたゝみ溪そびへ立ちそくに望をみるに遥か底に下りしかり此件の時節ありハ水明びかく冷しからしとなり是を阿闍梨が善光寺詣での体とすとかやいふべし俗呼て

阿闍梨池ともいふなり又櫻が池乃祭として古来より
ちかし来りしハ八月彼岸乃中日にて有りし若干の
者ハ精進潔斎して八升ほどの曲物に強飯を握り
盛りこれを以て漫々として千仞の池に沈む
へる諸人物いふ山のことくひざまづきて真中と祈り
しかありけれど是にてふしきなくに呼ハし八曲物
此ふめさぬ浮出し出て飯ことごとく三日路へ通て曲物一つハ
あまりは浮ふり今にハ善光寺へ贈りたまふとかや

錦織寺号曲錦織事

むかし親鸞上人江州もり脚乃湖水より光物出て
漁者いと悲しむをいかにして知りけり一心ニ
称名して光のもとを袈裟にてすくいけれバ毛は
弥陀乃尊像飛び移り給ふ上人彼の像のためニ
木部村といふ所に一宇をたて木部寺とかや
号し代々一向宗にて有りしが後のちより浄土
宗となりぬ文禄四年なる時佛殿の本尊も音し
けるが往昔仁誉和尚燭を乗てもてその示しあり光
明かゝやき此土乃人々をみぬ容儀あるかしき女人

あるひハ糸を巻き杼を弄し機を鳴してあかり
和尚おどろき是ハいかにとのぞきしに中にハ又さし
かゝる女ありて帳をつくりさしも來りし八案の如く
かの龍宮よりきたりて此寺の本尊佛に手帳を
織てまゐらせよとの佛勅をうけて天上よりまいりけるとて
織たる錦を和尚にあたへて瓔珞四方にかゞやき天衣
ひるがへして空たかくのぼりぬ仁誉これハ希代
の事なりとて後陽成院の御宇に廣橋殿を以て奏
問を經られしにハ奇特の事なりとて辱も勅許ありて

寺号を錦織寺とぞ賜りぬ今にいたりて住職
の時ハ廣橋殿の奏にて參内せしむ此縁によりて
又其照寮佛眼院乃存命とて僧天女錦を織する
事を慥にしたりしと寛文九年齢八十六の時かた
られし

天狗一夜にて法灯寺を作る
紀州有田郡由良の法灯寺ハ七堂伽藍の地なりしが回
禄にかゝりて炎ひしかハ取立べき便りなくて草菴に
て假り庵のやうにして有し或時僧一人来て住持にあひ

すりつゐてハ此寺ハ幾たび建立ありとも火災あるべし
其故ハ開山法燈國師の文字永く去り火燈と書かれ
但し此寺一度造営の志あらバ我造立して後ハらせん
ありおりし夫も徒おかりハ焼失すへし但し護摩堂
一宇ハ残りなん鎮めの日より已来御祈願これあり
あり昼夜心を尽しとくるなし縦ひ焼失す九輪修造へ
せんとす偏ニ希と思ハばさもあらバいと易き事也とて
領伏せられし去りとに住房ハいかくれ人のと問ま
あれど我ハ上州赤木山乃杉の塔と申すもの也とて

いふ毎に申て消られしけるハ二三箇の大縁を造営を
へきを宜ひしてハ礼謝ありて両僧をともなひて上州
ありけりしある赤木山より里人ハ杉の房ハと
是ハ此所に大天狗ありて住し悔すとて舌を
あらひく怖しければ通使をなしあたへてハ叶かたし
そも我等ハ岨をつたひ蘿桂乃根にすがりて今に
ようやく辿りし九折なる嶮難なる山伏二人出来て法燈
寺乃使僧なればいかにも案内せんとて杉の房に
さまにとて先立てゆくに金銀珠玉の宮殿楼閣いら

さる浄土の荘厳もかくやと目をおどろかし肝をひや
すゝり珊瑚の椽をはなり瑪瑙の階を上りて松の房の
御おなり戦兢としてあゆみし侍僧遠境を志のきぬ
まゐり御堂建立あるは未年ばかりくみ給ひし寺へ
下りし堂へも焉より火を滅しけんとすべかられし深く
いひ合られしその眼ばし金色のひかりをはなち鼻高く
して怖しさいふばかりなり先の山伏二人まりて送り来
らせよのもしゆきさりくせうが肩にかりつき目をとぢてその
身をもいへりげくし教しぬくにつきさ二時ばかり處

空を飛行するやうにおぼえしが足の地につくとおもひて
目をひらきみれば山伏ハなくて法燈寺の庭にぞ立たり
ある頃て近き所の門をたゝきてそれより先年の月日に
おとしけれバ急ぎ出てむかひ所の者にもいひあはせ静まり
おりておほしける数十万人の声して宮木挽音手斧
槌音さまぐきこえしが夜のあけてみれバ七堂伽藍の
さながら金銀をちりばめ珠玉をかざりて立られしかバ
云しに違ハずやがて又回禄ありしにむすびしお護摩堂
ハ恙なく今にありて有けるとなん

信州駒ヶ嶽馬化して雲に入る

寛文四年の尾州より木曽路順見のありし大目付佐藤半太夫勘定方天野四郎兵衛金役天野孫作材木役都築弥兵衛小目付真鍋茂太夫等なり木曽出役の内そであの日なり山村甚兵衛家来三人所の百姓を召連て駒が嶽の麓より谷筋を見渡して嶽に上る嶮岨の中ほどに轟音とうちてめづらしき大なる芦毛馬の首の毛も尾も地にひきたまひき眼のひかりハ鏡のごとくなりし其形相おそろしく身の毛竪て恐れし

然るにかの馬人影を見て恐れ中天まで走りあがりて登ましが刻の雲たち覆ひ北の方へ飛びさりしその跡ハ其行衛を見るものにあらずちかくしその東の方なり駒のかたちしたる大石ありそこにおいて雲たちのその岩ありそれも海上へのぞく

芹川千代古道本説

行平卿の嵯峨の山にゆきたまひて芹川の千代の古道跡ハ今ハありし此歌ありそて嵯峨の芹川の千代のむかし〳〵名所なりしゆへにそれよりしこのわたりへ人

世ノ始めかうしたまふハ井川乃かう幸ハ嵯峨天皇の初
てなさせ給ひしがそのゝち淳和仁明文徳乃三帝を
こして光孝天皇乃御代まてしれし御かた再ひ
井川乃かう幸ありし時の歌あり嵯峨天皇乃御例なれど
後見竹田の井川すてて嵯峨の山といひむかしを慕ふせ
まかふかう幸ありかハ代乃古風とハ讀し御門を
とりたよくてかせしつハいつもかう例なりけりして
傳ふし

九百年来賣家

能登國鵜嶋といふ所の酒屋与三兵衛と云者の家ハ
むかし弘法大師乃御代まで建しよりさのみこはれず
改めなをさずといひ傳へしたまひしが何の家の造作を
さあらて柔れをねらしうかれど歌なり
是より七十年乃たのまき雪のあること十すゑまでも下の七字ハかはらし
あのみ縁をなりいましきかかれど人ぞゝる不思議
しきあらり弘法大師の御筆の額を殘りしとかや

[illegible]

島田藏書